

善のための努力がなされているが、改組以降、専任教員の減少は続いている。

改組後の改善点としては、英語において、2単位、30名定員のネイティブのクラスをほぼ全学的に提供できるようになったことと、すべての言語において集中クラスを設けたこと（金子一郎、「少人数集中教育」、『大学教育研究年報』、第1号、1995年）、そして、各学部の英語教育への関与を増すために、英語教育の主体を学部に変更したこと（外国語教育改善特別検討委員会、『新潟大学における英語教育改善のために』、2001年）が上げられる。

3. 平成14年度外国語教育に対する意識調査

1) 基本データ

実施時期 2002年8月

調査対象 新潟大学第3年次生

調査方法 悉皆調査

結果 回答者505名/2603名中 (19.4%)

2) 回答者の属性

学部	人文	法	経	教育人間	理	医	歯	工	農
	11.9%	13.3%	9.3%	18.6%	7.7%	14.7%	4.0%	12.7%	6.7%

性別	女	男
	53.1%	45.5%

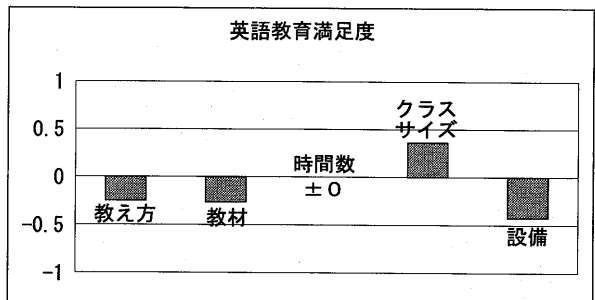
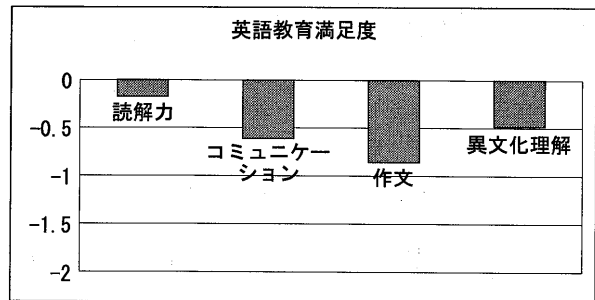
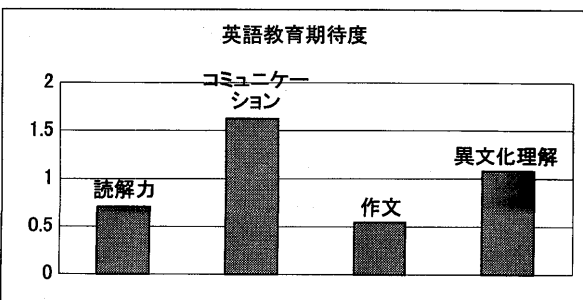
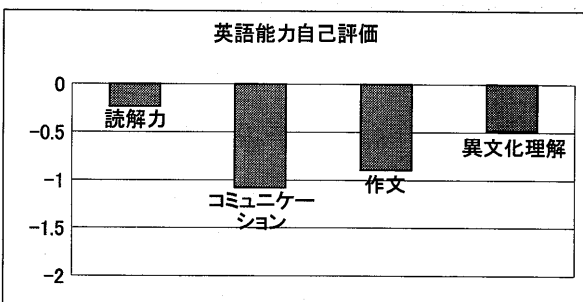
3) 英語回答結果

1年次に履修した英語単位の平均 3.85単位

2年次に選択した上級英語の平均 0.7単位

英語再履修の経験有り 5.9%

英語公的検定試験の受験経験有り 62.0% (TOEIC48名、TOEFL 5名、英検325名)



大学の授業で英語を熱心に学習したと思うか。

1. そう思う (9.3%)
2. ややそう思う (23.4%)
3. あまりそう思わない (46.7%)
4. そう思わない (19.6%)

英語の授業の担当者はどちらがよいか。

1. 日本人 (7.3%)
2. ネイティブ (29.1%)
3. 両方 (51.3%)
4. どちらでもよい (11.7%)

能力別のクラス編成に賛成するか。

1. 賛成 (73.3%)
2. 反対 (24.8%)

TOEICなどの公的検定試験を期末試験に使うことに賛成するか。

1. 賛成 (58.0%)
2. 反対 (40.6%)

1年次に英語のための特別集中コースがあったとしたら、参加していたと思うか。

1. 参加していた (42.6%)
2. 参加していない (56.4%)

高校時代と比較して現在の英語力をどのように考えるか。

1. 現在の方が上 (9.5%)
2. 同じ (16.6%)
3. 高校時代の方が上 (72.9%)

専門科目で英語の実力不足を感じたことがあるか。

1. はい (65.7%)
2. いいえ (33.1%)

大学生になって、留学や語学研修をしたことがあるか。

1. ある (5.9%)
2. ない (93.5%)

将来、卒業後も含めて、留学や語学研修の希望を持っているか。

1. ある (45.9%)
2. ない (53.5%)

大学生になって、英語学校に通ったことがあるか。

1. ある (5.9%)
2. ない (93.5%)

これから英語学校に通いたいと思うか。

1. はい (32.3%)
2. いいえ (66.5%)

大学で高学年次生に向けたEGP, EAP, ETTなどの中・上級英語を取りたいと思うか。

1. はい (28.5%)
2. いいえ (70.3%)

今後、就職活動や工作上、英語は必要だと思うか。

1. はい (91.5%) 2. いいえ (7.9%)

4. 英語調査結果からわかること

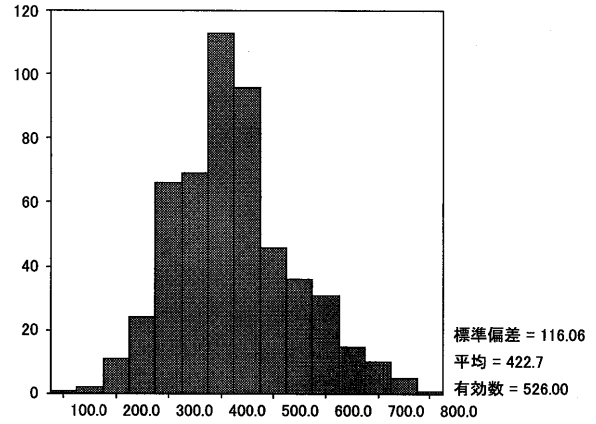
- ・英語検定試験の受験率の高さに見られるように、回答者は、比較的英語に関心が高い。
- ・コミュニケーション能力・作文能力に対する自己評価が低い。自己評価の低さは、英語に限ったことではなく、新潟大学学生の特徴である（有本章編、『大学設置基準の大綱化に伴う学士課程カリキュラムの変容と効果に関する総合的研究』、2001年）。
- ・コミュニケーション教育・異文化理解に対する期待度が高い。コミュニケーション能力については、期待が高いゆえに自己評価が低いという見方もできる。
- ・コミュニケーション教育・作文教育に対する満足度が低い。これは、毎学期行われている授業評価において、英語の結果が高いことと矛盾する。例えば、平成13年度前期の授業評価において、51.9%の学生が英語の授業に満足し、やや満足している学生を合わせると、その割合は89%にも達する。授業には満足でも、総体として、英語を習得したという実感が、学生には乏しい。
- ・教え方・教材・設備に対して不満足である。教え方・教材は、必ずしもコミュニケーション中心となっていないのではないかとと思われる。
- ・英語教育に期待しながらも、32.7%しか、英語を熱心に勉強していない。これは、逆に言えば、それほど勉強しなくても単位の取得が可能であったことを示す。
- ・半数以上が、日本人・ネイティブ双方の授業を期待し、能力別のクラス編成や公的検定試験の利用に賛成している。これは、教育効果の向上や評価基準の設定に、学生自身が賛同していることを示す。
- ・72.9%が高校時代の方が英語の学力が高かったと考える。これは、信州大学の検証結果にも沿うものであり（信州大学教育システム研究開発センター、『信州大学学生の英語能力と学習環境』、2002年）、大学入学後、英語学習時間の決定的な不足を示す。授業外の自学自習が可能となるような教育プログラムの構築が必要である。
- ・6割以上が、専門科目において英語の実力不足を感じ、9割以上が、卒業後英語の必要性を感じている。しかしながら、留学への希望は高いものの、英語学校への出席や上級科目の履修には消極的である。この点に関しては、願望を持ちながら、必要とされる努力を厭う学生の姿勢にも問題がある。

5. TOEICの試行結果

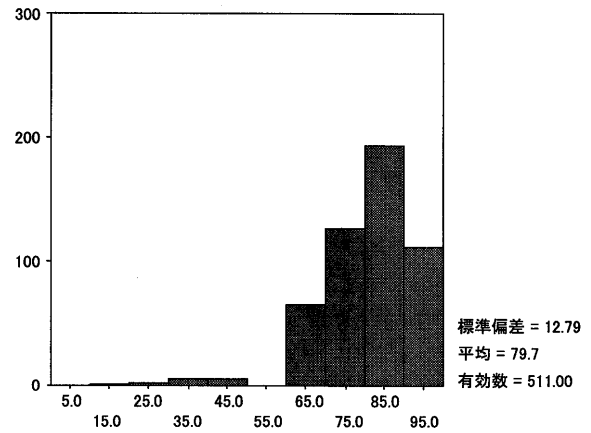
平成15年5月、新入生526名を対象にTOEICの試行を行った（平成15年度学長裁量経費）。この結果について、センター試験英語の点数、二次試験英語の点数、前期英語の成績と比較することができた。その結果は、

以下の通りである。

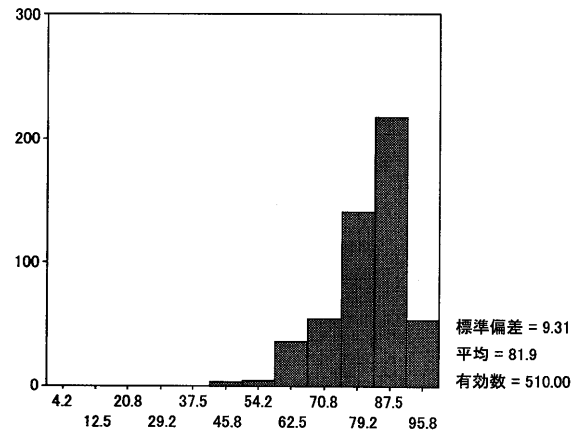
学部	人文	法	経	理	医	農
人数	98	114	112	77	70	55



TOTAL 図1



前期1 図2

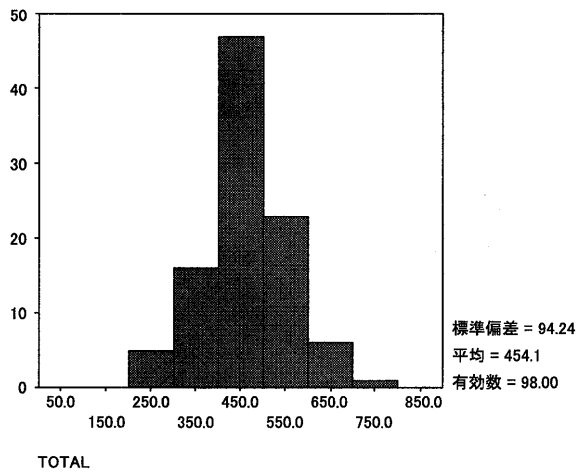


前期2 図3

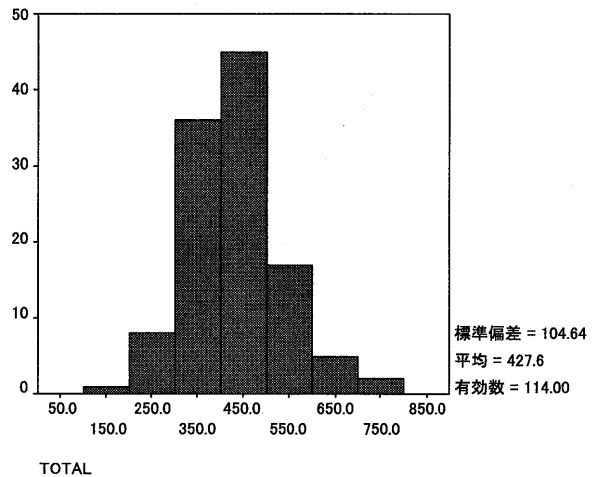
相関係数 表 1

		TOTAL	センター試験	二次試験	前期 1	前期 2
TOTAL	Pearson の相関係数	1	.609(**)	.598(**)	.272(**)	.372(**)
	有意確率(両側)	.000	.000	.000	.000	
	N	526	447	257	449	449
センター試験	Pearson の相関係数	.609(**)	1	.668(**)	.188(**)	.197(**)
	有意確率(両側)	.000		.000	.000	.000
	N	447	521	300	440	441
二次試験	Pearson の相関係数	.598(**)	.668(**)	1	.186(**)	.202(**)
	有意確率(両側)	.000	.000		.003	.001
	N	257	300	301	254	256
前期 1	Pearson の相関係数	.272(**)	.188(**)	.186(**)	1	.368(**)
	有意確率(両側)	.000	.000	.003		.000
	N	449	440	254	511	500
前期 2	Pearson の相関係数	.372(**)	.197(**)	.202(**)	.368(**)	1
	有意確率(両側)	.000	.000	.001	.000	
	N	449	441	256	500	510

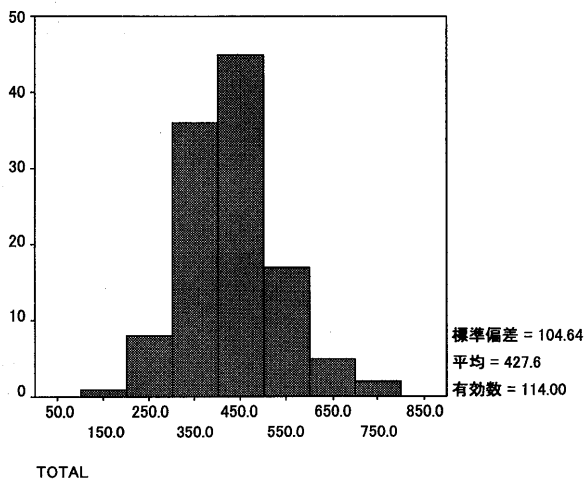
**相関係数は 1%水準で有意(両側)です。



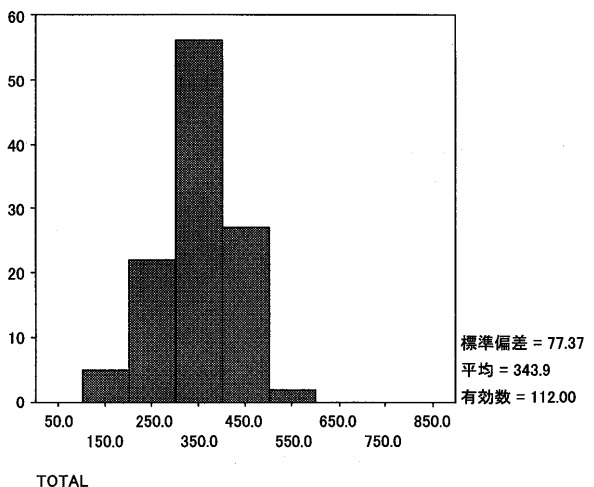
人文学部 図 4



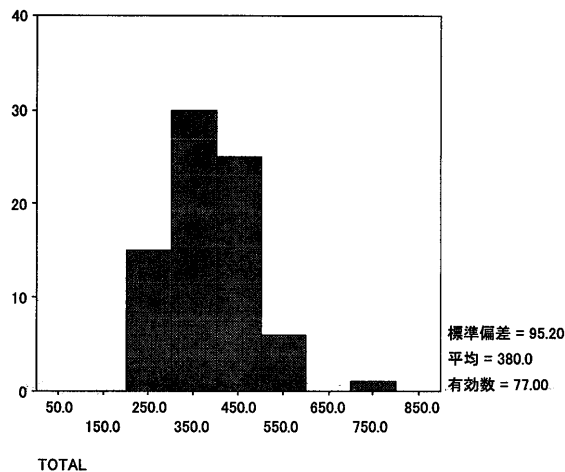
法学部 図 5



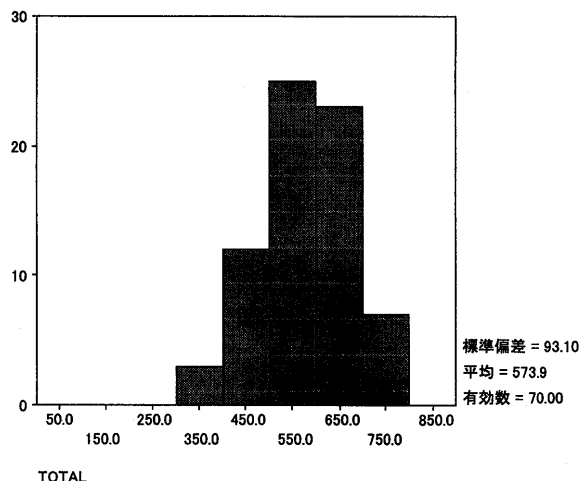
法学部 図 5



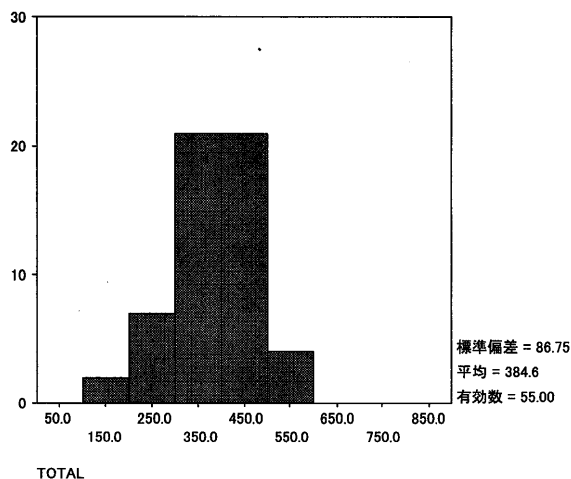
経済学部 図 6



理学部 図7



医学部 図8



農学部 図9

山口大学1年次生のTOEICスコア（山口大学大学教育センター、『センターだより』、第4号、2003年夏）表2

学 部	点 数
人 文 学 部	461
教 育 学 部	398
経 済 学 部	410
理 学 部	381
医 学 部	582
医学部保健学科	472
工学部・昼間	384
工学部・夜間	334
農 学 部	409
農学部・獣医	555
合 計	414

新潟大学生のスコア（図1）は、山口大学1年生のスコア（表2）と比較して遜色ないものである。また、希望者が個人で受験するTOEIC公開テストの結果よりは低いものの、大学で一括して受験するTOEIC IPテストの結果を大幅に上回っている（表3）。

全体及び学部毎の結果を見て言えることは、学生間に学力の差は極めて大きいということである（図4-図9）。現在、能力別のクラス編成は行われていないが、TOEICで400点以上開きのある学生を同じクラスで教育することは無理であると思われる。

TOEICとセンター試験及び二次試験は大きな相関関係があるが、大学の成績とはほとんど相関関係がない（表1）。TOEICが他のテストと共通する英語の能力を測っているのに対して、大学の成績は、どのような能力を測定しているのかが不明である。リスニング偏重という批判もあるTOEICではあるが、これらの結果から、英

TOEIC全国結果（TOEIC運営委員会、『2002 Data & Analysis』）表3

	Listening	Reading	Total
IP（大学1年）	210	161	371
公開（大学生）	303	245	548

語の実力を判断するためには、かなり妥当なテストであることがわかる。

この問題に一つの解釈を与えるのが、英語の成績の度数分布である。図2-図3に見られるように、前期英語の成績は、素点80点付近に集中しており、標準偏差も10程度である。つまり、他のテストと違って、大学の成績は、ほとんど実力の差を明確にしていない。これは、あまり熱心に学習しなくても、ほどほどの成績が付くことを意味する。

6. 英語教育の取組むべき課題（自由記述とTOEICの結果を参考にして）

- ・段階・目的を明確にした体系的な教育プログラムが必要である。学生間に能力差・意欲差は広がっている。全学生に同じような学習を求めることはできない。
- ・小人数授業の実現。ネイティブの授業は、30人以下を実現しているが、それでも、コミュニケーションのためには、人数が多い。
- ・教授法プロフェッショナルの不在。学生がコミュニケーション能力の向上を期待しているにもかかわらず、授業はその希望に対応していない。ただ、単に、ネイティブの授業であるというだけでは、コミュニケーション能力の育成にはならない。
- ・英語を修得するために必要な努力について、具体的なイメージが欠けている。これは、授業を契機として、その後の自学自習が可能となるような教育プログラムの必要性を示唆する。
- ・非常勤依存率7割を超える外国語教育の担当者は、教育目的や教育方法、評価基準において、統率されていない。
- ・初中等教育段階における、コミュニケーション英語の浸透も、現在の大学における、訳読中心の英語教育と齟齬を生じさせている原因ではないか。
- ・近年広がっている認識は、ツールとしての英語であり、文化や知的訓練とは切り離された英語である。この認識によると、英語教育もより機能的なものにならざるを得ない。この点に関して、英語教育の担当者に、英文学者や言語学者が適当であるかどうかは疑問である。
- ・平成16年度より、大幅な非常勤講師削減が必要となる。新潟大学の場合、非常勤講師の多くは、外国語を担当しており、時間数において、英語の担当者が圧倒的に多い。このため、全学平均4単位の必修英語は、もはや維持することができず、何らかの改革が必要である。この場合、新潟大学学生としての最低水準の設定と、意欲のある学生のために、どれだけ集中及び上級英語を設けることができるかが課題となる。

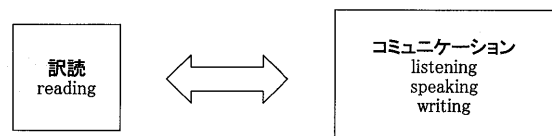
7. 考察（二つの事例から）

調査結果から、これまでの担当者中心、評価の緩やかな英語教育に対して、学生が不満足であることが明確になった。今後は、限られた資源を用いて、どのような代替策を用いるかが課題となる。

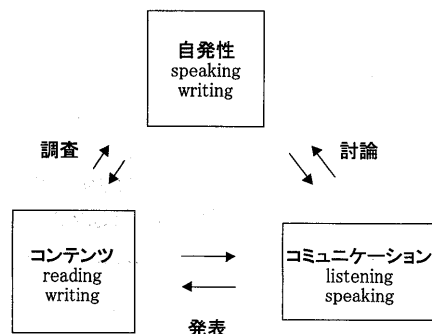
英語教育においては、既に、国際基督教大学（吉岡元子、「英語でリベラル・アーツ」、絹川正吉編、『ICU（リベラル・アーツ）のすべて』、2002年）や大阪女学院短期大学（智原哲郎、「理念を高く掲げた英語を主軸にする総合科目の実践」、『大学教育研究年報』、第6号）において、優れた実践が行われていることが知られている。これらの大学は、総合的な学習能力を開花させることにより、4つの言語能力の均等的な発達を目指すものである（図11）。

しかしながら、これらの事例は、新潟大学のように大規模の大学で、しかも、学生、教員ともに必ずしも英語教育・学習を活動の主眼にしていなかった場合、適用が可能であるとは思えない。新潟大学において、このような教育を導入するためには、あくまで、少数の希望者を対象に特別コースを設けることでしか対応できない。

むしろ、全学的に適用可能なのは、山口大学のようにTOEICを指標として、英語教育の標準化・効率化を図ることであろう（図12）。TOEICにおける目標点数を設定することは、学生自身に自学自習のための具体的な目標を与えることとなり、教員の恣意的な授業を防ぐことともなる。そのためにも、現在、単位認定に用いられているTOEICの点数を、実現可能な点数に引き下げるのが求められる。今日、再履修学生による教室定員オーバーの問題が問題となっているが、このような学生については、受講ではなく、TOEICのスコアによる単位認定が望ましい。

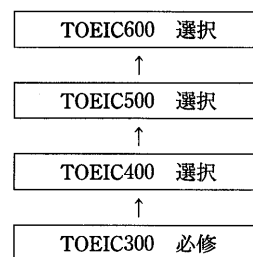


新潟大学における事例 図10



国際基督教大学・大阪女学院短期大学における事例 図11

山口大学における事例 図12



新潟大学における英語単位認定基準 (TOEIC) 表 4

650	2 単位
750	4 単位
850	8 単位

山口大学における英語単位認定基準 (TOEIC) 表 5

300	2 単位
400	4 単位
500	6 単位
600	8 単位

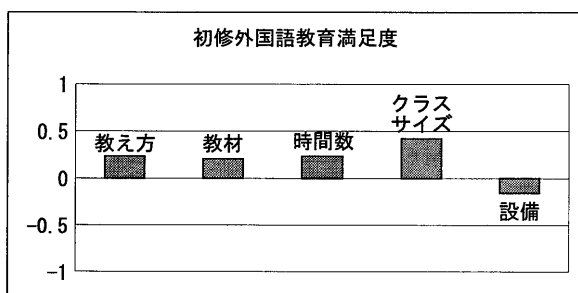
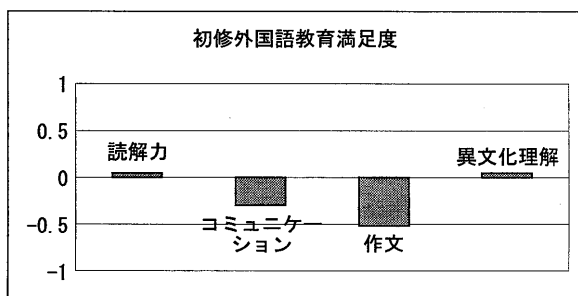
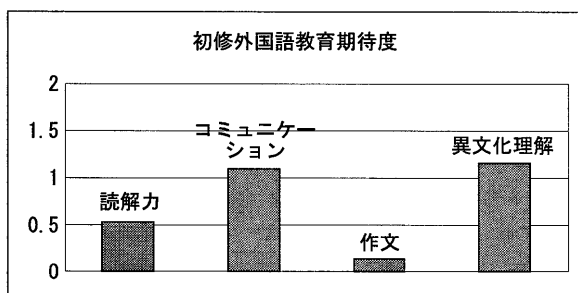
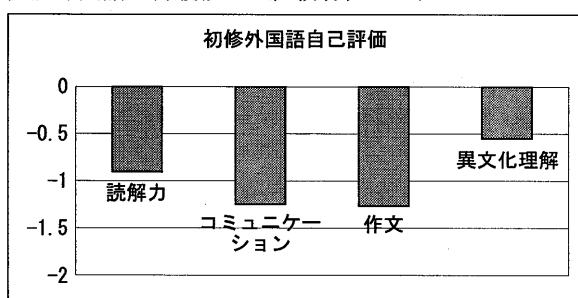
8. 初修外国語回答結果

選択した初修外国語

初修外国語	ドイツ語	フランス語	中国語	スペイン語	ロシア語	朝鮮語	なし
	50.5%	17.0%	13.5%	3.8%	4.6%	2.6%	6.3%

1・2年次を合わせて修得した初修外国語単位の平均
4.5単位

初修外国語を再履修した経験有り 5.5%



初修外国語を熱心に学習したと思うか。

1. そう思う (20.6%)
2. ややそう思う (30.9%)
3. あまりそう思わない (26.5%)
4. そう思わない (14.1%)

初修外国語の公的検定試験を受けたことがあるか。

1. はい (7.3%)
2. いいえ (84.6%)

初修外国語で学んだ言葉話す国に行ったことがあるか。

1. はい (7.3%)
2. いいえ (84.6%)

専門科目において、初修外国語を使う必要があったか。

1. あった (13.9%)
2. なかった (78.2%)

これからも選択した初修外国語の勉強を続けて行きたいか。

1. はい (31.9%)
2. いいえ (59.6%)

現在、初修外国語の知識はどの程度残っているか。

1. 9割以上 (2.6%)
2. 6割以上 (10.7%)
3. 3割以下 (46.1%)
4. ほぼゼロ (32.7%)

もし、初修外国語が必修でなかったとしたら、どうしていたと思うか。

1. 選択していた (46.5%)
2. 選択していない (44.4%)

もし、初修外国語のための特別集中コースがあったとしたら

1. 選択していた (24.0%)
2. 選択していない (67.1%)

初修外国語をやるよりも英語の勉強の方が大切だという意見について

1. 賛成 (48.7%)
2. 反対 (41.0%)

外国を理解するためには言葉を理解する必要があるという意見について

1. 賛成 (80.0%)
2. 反対 (10.9%)

9. 初修外国語調査結果からわかること

- ・すべてにおいて、自己評価が低いのは、英語と同様である。
- ・コミュニケーション能力・異文化理解への期待が高い。
- ・英語と違い、読解力育成、異文化理解に対しては、満足している。また、コミュニケーション能力の育成については、不満足ではあるが、英語より満足度が高い。初修外国語の履修については、言語自体の習

得よりも、異文化理解の一部として評価されている。

- ・初修外国語は、教え方・教材・時間数において英語に優れる。これは、初修においては、複数から選択という競争が働くことも一因ではないかと思われる。
- ・半数以上が、初修外国語を熱心に学習したとしており、この比率は、英語よりも高い。一から始める初修外国語教育は、既成概念が出来上がっている英語よりも大きな可能性を持つと思われる。
- ・半数近くが、初修外国語を選択制にして欲しいと考えており、英語の勉強の方が大切であると考えている。これは、大学教育＝初修外国語の履修という前提が崩れかけていることを示す。実際、私立大学を中心に、外国語教育は英語のみという大学が増加している（倉敷芸術科学大学教養学部、『「大学の教養教育に関する実態調査」報告書』、1999年）

10. 初修外国語教育が取組むべき課題（自由記述を参考にして）

- ・現在の履修要件は適当であると思われるが、一律必修には無理が見られる。熱心な学生には、より集中度を高めた授業を確保する必要があるが、そうでない学

生には履修免除が適当であると思われる。

- ・外国語修得を異文化理解の一部と考える学生が多いが、これは、言語習得を目的としない講義「言語文化基礎」において代替可能である。
- ・ツールとしての英語に比較して、初修外国語は、より文化的な教養の一部として位置づけるべきものである。したがって、今後は、入門科目としてよりも展開科目として分類される方がふさわしい。

11. 平成16年度よりの初修外国語改革

初修外国語の改革は、以前からの懸案であり、平成16年度より改革が開始される。改革の趣旨は、選択と集中である。現在の計画では、人文学部・法学部・理学部を除く学部で、「言語文化基礎」2単位の履修をもって初修外国語の最低要件を満たすことができ、熱意のある学生は、より集中度の高い3単位・4単位の履修及び2年次以降の中級履修を行うこととなる。

これは、奇しくも平成16年以降の非常勤講師削減に対応するものとなった。教育資源の削減に対処しつつ、今以上の改善を実現する点において、初修外国語の事例は、英語教育の先を行くものである。